

## 第 18 回 A地区仮設住宅訪問 12月6日(火)

参加者:松下、介護福祉士会 2 名、生活支援アドバイザー(記録:LLP まち・コミ友田)



今にも降り出しそうな空模様の中、松下は大学を出発する直前に環境社会学部の教員が育てたパンジーとビオラの苗を車に積み、開始時間の 10 分前に集会所に到着した。

車を止めて荷物を降ろしていると、そこヘシルバーカーを押して通りかかったのは、「絵手紙」の時に思わず立ち上がって、けん玉に挑戦した S さんである。日課としている夕方の散歩らしい。松下が「ちょうど良い時にお会いしました。これから、クリスマスの飾りを作るので一緒にどうですか。」と声をかけると、「股引姿じゃ、みっともねえから」と歩き出す。「寒いので、上に 1 枚ズボンをはいて来ててください。待ってます。」と、後ろから声かけする。

集会所には、いつも協力してくださる千葉県介護福祉士会の二人と女性が 1 人待っていた。会場の準備を託し、松下は戸別に声かけに廻る。先程の股引の S さんの隣の I さん（常連の女性）は、戸外で一心にバケツに手を入れて何やら作業をしている。「こんにちは」と声かけすると、驚いたように「今日だったの。今日はダメだよ。今、野栄町に行っていわしをバケツ一杯買って来たから、これを始末しなきゃなんないよ。妹が好きだから酔漬けにして送ってあげようと思って・・・」と、話しながらも手を休めずに背黒いわしの下ごしらえをしている。「今日はクリスマス飾りを作ります。それほど時間がかからないので、遅れても大丈夫ですから来ててください。」という、「わかったよ。塩したら、行くよ。」と、一層忙しく手を動かしている。更に、2 列目 3 列目と声かけして廻ると、綿入り袴てんを着た H さんが顔を出す。誘うと「寒いから、こたつにもぐっていたよ。」と言いながらも、いつもの馴染みの顔に安心したのか、すぐに同行した。途中、T さんにも声かけすると、T さんもすぐに「それじゃあ」と立ち上がり、同行した。

集会所に戻ると、もう 1 名の参加者がおり、外出から戻った生活支援アドバイザーの M さ

んと7名になったので、始めることにした。

今日のメニューは、当初、ポストカード作りを予定していたが、森が大学で外せない用務ができたため、森の指導を受けた松下がクリスマスリースのペーパークラフトを担当することになった。紙皿と色画用紙とシールなどで作るが、どこにも売っていない独創的なクリスマスリースの完成が期待される。

材料はすでに森によって準備され、手順よく作業が進められるように、紙皿の縁の色づけや画用紙などがカットされている。完成見本をテーブルの中央に置き、やる気満々の参加者にむしろ松下が緊張した様子である。「はい、それではまず緑色の長い紙を線に沿って折り、8ミリくらいの間隔でその折った線までハサミで切り込みを入れてください。」と松下が言う。「わあ、8ミリより広くなっちゃったよ。」「ああ、切り込みすぎちゃったよ。」などと言いながらも、皆、楽しそうに手を動かしている。Hさんは、いつものように介護福祉士会の方の手助けで、「できないよ。そんなのできないよ。」と言いながらも、楽しそうである。そこへ、Tさんの孫(小学2年生)がやって来て、生活支援アドバイザーMさんの隣に席をとり、リースづくりに加わる。T君は、震災後しばらく不登校になってしまった経緯があるそうだ。「今度は、切り込みを入れた反対側を、針葉樹の葉になるように細く斜めに切り込みを入れましょう!」と、松下が声かけをする。「もっと細くなんて難しいね。」「太さが違っちゃったよ。」などワイワイやっていると、案内に廻った際に、バケツ一杯の背黒いわしを下ごしらえしていたIさんが、水仕事で膨らんだ手をこすりながら掛け込んできた。「早かったですね。」と松下が言うと、「始末して、塩までしておかないとね。」と答え、すぐに皆の後を追って作業に取り掛かった。

切り込みを入れた紙を紙皿の外周に貼り付け、細く斜めに切り込んだ部分は左右に開き、中央には切り込みで透かし柄を作った赤色紙を貼り、カラフルなシールでデコレーションすると、クリスマスカラー満載になった。極めつけはベルである。森の発想で、お弁当のおかず入れに使うアルミ容器を指に添わせて縮め、ベルを形づくった。それを2個ボンドで付け、赤いリボンや玉飾りをそれぞれ思い思いにデコレーションした。

Iさんが言う。「こんなの飾ったら、サンタさんプレゼント持って来てくれるかねえ。」「そうだねえ、来るといいねえ。」と誰かが言う。続けてIさんが言う。「この間、T文化会館であった『モスクワ少年少女合唱団のコンサート』、あれは良かったねえ、心に染みたよ。少年少女合唱団はウィーンが一番だって聞いていたけど、モスクワも良かったよ。日本の歌を歌ってくれてね、本当に心に染みたよ。A市少年少女合唱団も返礼にロシアの民族衣装を着て、ロシア民謡などを披露したけど上手だったよ。」と、まだそのときの余韻に浸っている様子である。それを聞いたKさんは、「用事があって行かなかったけど、残念だったわ。行けば良かった。」と、残念そうにつぶやく。

被災された皆さんには、T文化会館において、時折、コンサートなどの招待があるようだ。しかし、会場までの送迎はなく自力での参加が条件のため、会場に徒歩で行けるA地区仮設住宅住民は良いが、I地区仮設住宅住民の場合は、行きたいと思っても必ずしも参加で

きるとは限らない。

1時間ほどで、参加者全員の個性豊かなクリスマスリースが完成した。壁際に置いたテーブルに全員の作品を並べ、それぞれの作品に皆で思い思いの評を施した。遠慮なく評が伝えられるのも、継続して開催される「手づくり、遊びの会」で、お互いの気心が知れてきたからからであろう。さて、先ほどまでのテーブルの上には、ささやかながら「ミニクリスマス会」の準備が整った。松下や介護福祉士会の方が持ち寄った漬物やシュークリーム・クッキーなどである。「クリームがいっぱい入っているよ。」などと、笑顔も一杯だ。

また、Iさんが言う。「昨日は一日中、パトカーが3台も赤色灯をつけて止まっていて気持ちが悪かったねえ。」「しばらく、パトカーが来ることもなかったのにねえ。」とKさんが言う。松下が「何かあったのですか。」と尋ねると、「親子喧嘩らしいよ。分かんないけどね。狭い仮設住宅で顔つき合わせていると、ストレスがたまるんじゃないの」とIさん。

間もなく大震災から9カ月を迎える今、Iさんのように新居の完成が真近かな人、何とか将来見通しの立っている人、全く見通しの立たない人と、それぞれの将来設計の事情の違いが浮き彫りになって来ている。そうした中で、将来見通しの立たない家族にとっては、仮設住宅はスペースといい、設備の質といい、厳しい生活環境に違いない。

外はすっかり暗くなり降りだした雨の中、皆、作品を大事そうに覆って、家路についた。このペーパークラフトが色を添え、素敵なクリスマスになって欲しいものだ。

後片付けを終え、ますます激しくなる雨の中、松下は残り半分のパンジー苗を持ってI地区仮設住宅に向かった。直接津波の被害等もなかった市街地の街道沿いの店舗のショウウィンドウは、おそらく例年と変わらないであろうクリスマスイルミネーションがにぎやかである。10分程で、多目的グラウンドに設置されたI地区仮設住宅に到着した。「車でわずか10分程のA地区仮設住宅とI地区仮設住宅の間には、表面的には「東日本大震災など何もなかったかのような街の様子」が広がっていて、なんとも言えない切なさがこみ上げて来たのはなぜだろうか」と松下は、自分に問う。

雨はますます強くなった17時過ぎ、I地区ネット裏の単身高齢者エリアに車を止め、前回初めて茶話会に参加してくれた聴こえに障害のあるSさんの所に向かった。灯りはついていますが、愛用の自転車がなく不在であった。知人に預けているという犬の散歩に出かけたのかもしれない。次にたずねたのは、おしゃれして大学祭に来てくれたKさん宅。90歳という高齢であり、茶話会で元気がなかったのが気がかりであったが、「おうっ」と元気な様子に安堵した。いつものメンバーで来ていると思い、Kさんは缶コーヒー3～4本を松下に渡そうとする。「今日は、一人です。」という、「そうか。」と1本差し出す。缶コーヒーをもらいながら、「次は27日ですから、来てくださいね。」と告げると、「27日か、そうか。」と、頭のスケジュール表に書き込みをしたようだ。

次に、様々な調整役をしてくれるNさん宅をノックする。「どうしたの、先生」とNさん。「パンジーとビオラの苗を環境社会学部の先生から頂いたので、明日にでも雨があがった

ら、皆さんで分けて下さい。」と、またまた調整役を託した。車に戻る途中、常連の M さんの住まいの前を通りかかると、寒風と土砂降りの雨にもかかわらず入口の戸が半分開いていて、台所に立つ M さんの足元が見える。「こんばんは。」と声をかけると、「あら先生、どうしたの」と元気な声。「パンジーの苗を N さんに預けたので、皆さんで分けてくださいね。」と告げると、「あら、どうもありがとう。分かりました。」と、生きる目標を失っていた 6 月の M さんとは格段の差を感じる張りのある声で返事が返ってくる。

あとひと月足らずで、新しい年がやってくる。150 戸の I 地区仮設住宅も、ぼつぼつと灯りのない戸数も増えてきている。